

2019 年度ミシガン州立大学短期留学プログラム参加報告書

B 類英語専攻 4 年 深井雄介

本プログラムの参加にあたっては、ミシガン州立大学とのコラボレーションにおいてアメリカの教育現場の中に実際に入って様々な経験ができること、アメリカの教育と日本の教育との違いを学ぶことなどを動機とし、参加者五名のうちの一人として参加することができました。本プログラムは、「グローバル化時代の教育と多文化共生」をテーマに、英語でのコミュニケーション力の向上や教育に関する幅広い視野を得ること、多文化社会の理解を深めること、また自国や自身の文化を見つめなおすことを目的に構成されています。前述の目的や目標を達成するために、現地では積極的に質問し、日本との違いを感じ取るように心がけておりました。

本プログラムでは、アメリカ・デトロイトの現地の中学校ならびに高校にて計四回にわたって日本に関する授業を行う機会に恵まれました。授業の構成や指導法について一から五人で議論を重ね、ミシガン州立大学の教授や学生などのアドバイスを仰ぎながら少しずつ改善し、十分納得のいく授業が展開できたことは大変嬉しく思いました。特に、生徒の実態が異なると授業の進行やアプローチも変わることを改めて実感し、「授業は生き物である」ということを再確認することができました。授業を作り上げるに至っては、生徒観・教材観・指導観の三つの軸のもとに授業の目的やその手段を明確化することの必要性を認識することができた点において本プログラムは大変意義深いものとなりました。また、海外の大学の授業を実際に受け、Zoom や Google フォームといったテクノロジーを前提にした授業展開に驚き、活用したいと思いました。

また、海外での生活では、自己主張することと自分のアイデンティティや強みを認識することの大切さを再認識することができました。日本での生活と違い、文化背景を共有していない他者との関わりにおいて、「言わなくてもわかる」部分に頼ることはできず、自分の思いや願いを言語化して相手に事前に伝え、主張していくことで、より良い生活を送れるのだと感じました。例えば、ミシガン州立大学での教育心理学の授業の際、グループ活動となり、「グループで題材を設定し、学習者が段階的に適切に学習できるための教師側の手立てを考えよ」という課題がでました。私は小学校からアマチュア無線を趣味にしているため、モールス信号が題材になりうるのではないかと考え、グループに提案しました。ネイティブスピーカーの学生たちを相手に英語でモールス符号の効果的な段階的学習法の一例を提案するのは初めての経験でしたが、モールス符号が長点と短点で構成されているというアルゴリズムを説明し、「モールス符号は数字から学習し、母音、子音、記号の順に学ぶように指導したらよい」という結論を得ることができました。自分の強みを基に自己主張し、グループからの受け入れられるという実感を得ることができました。

さらに、本プログラムを通し、ミシガン州立大学での滞在やイスラミックセンターの見学、

大学内博物館や附属幼稚園での研修、デトロイトの現状に触れるなどして前述の目的を達成できたと感じています。特に、附属幼稚園では幼児教育の担い手を確実に養成するため、日本に比べて長い期間にわたって現場での実習を経験していること、また、博物館と教育現場の連携を模索することが教育の質の向上の一助になること、大企業の撤退がもたらす経済的打撃やその禍根が大きいことなどを学ぶことができました。

今後の進路への影響について、本プログラムを通して、改めて教育の持つ意義や素晴らしさを感じることができました。学部卒業後は企業に勤めることになっており、経営やテクノロジーの知見を高めていきたいと考えています。その上で、ミシガン州立大学やミシガン大学の卒業生が卒業後も様々な形で大学を支援していることや、博物館が教育現場との協働を模索していることなどを踏まえ、私も本学を卒業後も、教育の意義深さや現場の持つ様々な課題などに関心を持ち続け、将来において何らかの形で教育の道との接点を模索していきたいと考えました。特に、教師が教科指導や生徒指導といった学校教育の根幹に注力できる環境であることや、子どもたちが自身の強みを伸ばせる教育の在り方について、微力ながら自身にできることはないかを考え続けたいと思いました。

最後に、本プログラムでは、ミシガン州立大学、デウィット中学校、キャステック高校の三つの教育現場の中に入ることができました。その中で、いずれの教育現場でも、様々なテクノロジーを使った教育が実践されていることに驚きました。ミシガン州立大学では Zoom や Google フォーム、Google スライドを活用した授業を展開し、デウィット中学校では Chrome パソコンや Newa を活用したオンラインテストを行い、キャステック高校では Quizlet や Gimkit を用いた授業の展開をしていました。テクノロジーを活用した様々なツールを学校現場に取り入れ、子どもたちの学習効果を高めようとしている姿が印象的でした。日本の学校現場でも徐々にこういったツールを活用していこうという動きもありますが、いまだにメインストリームではありません。私は、現状の一斉授業を維持しつつ学習者の個別化を担保していくためには、こうしたテクノロジーを活用したツールがその一助になりうると考えています。日本の教育現場でメインストリームになることを願ってやみません。

末筆ながら、本プログラムに参加させていただき貴重な経験を得ることができました。本プログラムにご尽力くださいましたみなさまに対し、厚く御礼申し上げます。